



## 編集長(ダン シロウ)

年 4 回、22 冊目の編集である。マガジンを発行することは私にとって、生活の一部になりつつあるから、やらなければならないとか、締切に追われてという感覚はない。

お正月が来るとか、GW だとか、誕生日だとか、そんな感じに近い。定期的なものだから、他の用件を前後に調整しながら、年 4 回の編集時間枠を確保する暮らしだ。

同じく 10 年近く引き受け続けてきた家族心理学会のニュースレター(年二回発行)編集は、今年度末で交代して貰うことにした。あちらは 1000 人規模の学会の、前任者から引き継いだもので、それなりの約束事がベースにある。だから原稿依頼もしなければならないし、同じ人ばかりが書いているのは、いかがなものかという懸念もある。印刷物発行だからコストも配慮していた。

その点、この全記事連載物、web 発行のかたちをとると、そういう心配が一切ない。連動して、ワガママな企画やトライアンドエラーもしやすい。

私自身あちこちで、ますます、やりたいようにやる自由を持たせて貰っているので、その結果元気だ。生活者としても、子ども達は皆、独立し、夫婦二人の暮らしである。年齢的にも、そういう時期に入っている。

ところが、編集員の二人(千葉・大谷)は、何もかもが真っ直中である。仕事のノルマをこなし、自主的研究や多様な役割を果たし、同輩との関係もこなす。

その上で、年四回、この時期には分担の原稿の編集作業を果たす。自身の原稿締め切りがあり、遅れる原稿の打診もしながら、ほぼ期日通り発行の季刊誌のスタッフとして機能する。

こういう仕事を使命のように果たし続ける人に、様々な恩寵が降りてくるのは必然だろう。二人の若いお父さん達の人生が、ますます充実し、次世代育成に

公私ともに励むのを嬉しく見ている。

## 編集員(チバ アキオ)

今年の夏、初めての経験をした。「デモ行ってきました。」学生からこう声をかけられたことである。1972 年生まれの私にとって、国会前、全国各地、そして私の身近でデモの話題がこれほど飛び交うのは 43 年の人生で初めてである。

「こないだ習ったあの先生おられたじゃないですか」「はいはい、あの先生やんね。」「こないだあの先生にデモで会いました。子どもさんと一緒に参加されましたよ」「そうなんや〜」…似たような会話がおそらく日本のあちこちであっただろう。学生と先生というだけではない関係を生み、つながりをつくり出しているのである。

…そんな夏が過ぎた 2015 年の秋に対人援助学マガジン 22 号が発刊となる。学会ニュースレターという企画から始まったマガジンがこうして 22 号を迎えることも、そして全国でデモ、国会前に数万人が集まるということも想像ができなかった。動いたら、継続すること！それがテーマだろう。

ここでも以前に取り上げたかもしれないが『独裁体制から民主主義へ 権力に対抗するための教科書』(ちくま学芸文庫、2012)の著者ジーン・シャープは非暴力運動の事例を長年研究してきた。その経験から世界の独裁的政治状況下にある国々の活動家が教えを乞うてきた。本の中には様々な行動が記載されている。それを読むと「そんなことやるよりも…」と話題になった「ハンガーストライキ」も立派な方法として紹介されている。他にも「ユーモラスな寸劇やいたずらを行う」「演劇や音楽会をする」「死者への墓参りをする」「セックスストライキをする」…。こういった様々な方法を織り交ぜて、これまで人々は、社会を変えようと日々努力し、成し遂げてもきた。その偉大さを思うと同時に、私たちが様々なことができることはまだあると感じる。そして、一方ではこの本を読むと、日本が抱えている状況は他の国に比べるとまだまだ恵まれていることがわかる。

われわれはこのマガジンでも既成の社会システムに働きかけている。私たちが意図しているのは緩やか

な変化だと思う。そういう働きかけが私たちのマガジンの持ち場だろう。

### 編集員 オオタニタカシ

最近、思わぬところで「マガジン、見ました！」と言われる機会が増えました。とはいえ、頻度は年に数回程度です。ポイントは「思わぬところ」という方で、こちらが読者として想定している範囲を超えたところで読まれていることがあります。先日の「見ました！」の声は、遠く地球の裏側から届きました。一方で、これは一面ではリスク要因でもあります。前号、千葉編集員が編集後記で書いた「ぎりぎりのところ」というのも、その通りです。

内輪でしか通じない理屈や議論がまかり通ってしまう集まりもある中、あえてWebという世界と通じる場所に自らの論を置くのは、覚悟が必要です。執筆者の皆さん、改めて尊敬です。そして、開かれた場に「マガジン」が置かれていることで生じてくる「思わぬこと」の中に、これまでにない新しい展開の可能性が秘められているように思います。

### ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は  
[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

### マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438  
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

## 対人援助学マガジン

### 通巻22号

第6巻 第二号

2015年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第23号は2015年12月15日  
発刊の予定です。

原稿締切2015年11月25日！

新規執筆者を常に募っています。連載誌ですが、必ず何回以上と決めているわけはありません。必要な回数、書いていただけるよう設定しています。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

### 対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1  
立命館大学大学院応用人間科学研究科内  
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

### 対人援助学会事務担当

### 入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1  
リファレンス内  
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

## 表紙の言葉

### 漫才師

若いコンビの漫才と客席の老人達とのギャップを、微笑ましく見ていられた時代。紳助・竜介のテンポに、ついて行けない客席が気の毒に思えた時代。みんな昔のことになった。光り輝いていた人がスキャンダルで消えた。

そしてお笑いから新しいスターが現れる。又吉直樹の小説「火花」は100万部突破の芥川賞小説になった。

このマンガは、描いたけれども何処でも使わなかった作品だ。たしか二人の舞台衣装が描いてみたかったのだった。